

朝夷巡嶋記

第二編

卷四

春

庫	105
入	50
出	169
40	數冊

嶋

嶋

嶋

嶋

~ 13
3093
9



吉田屋



朝東 馬記金傳第二編卷之四

東都 曲亭主人編輯

初輯第十七

磨死出を礪並の月
夢を占める黒川堂

吉田屋

朝東 三郎義秀ハ俱利伽羅山小てやうりなく怪死武者を思ふといふも
 騷死る気色ハなくて呵々とうち笑ひ汝はこそ何れぞ狐貉の化るるや
 戦死のみの冤鬼なるん調戲んとて出で近くよれ目よめ久世ん
 又望したとあはれどくいへんとなを進して刀の鞘よを掛はる件
 武者ハ還しく兩三歩馬を乗退三郎ぬ早もあかましの狐狸の類
 あらど當時あま撃れらる平家の士卒の怨灵中もあらど密ヤ
 りあつて假姿をあらうらう且く其処よあちの處とどめく馬

月 第二編 卷四

昭和九
七月三

乗るをり。間四五尺隔る。菅竹が下の臥石。尻うちけて。さそひゆ。其
 陽人をさる。和君が腰刀の俾てあま近づくことかひひじ。海うへを奇
 あひそ。こむるのい。淫くもあろほごくあまそ。その名をり。人の口碑。
 傳(ま)もをり。あは。義仲朝臣。ふろく。憑れき。北國の合戦。
 屢分捕功名ある。岡田冠者親義が。世な。魂。よ。む。さ。て。も。い。ぬ。
 壽永二年五月十一日。平家の大軍十萬餘騎。搦手の大將軍。越前三位
 平通盛。美濃守平知度。又追手の大將軍。小松の三位中將。惟盛。左馬頭
 行盛。薩摩守忠度等。平家の上臈。數を盡して。虎賁。猛卒。雲霞の如く。
 砺並志雄の大路より。ちや。越中國へ。ち入ると。木曾殿。五萬餘
 騎。六動寺の國府より。般若野の河端へ。徐と推蒐。さ。ま。相後。小
 小十郎藏人河内行家。足利。矢田判官。代義。兼。指六郎親忠。宇野。弥平
 四郎行平。今井。四郎兼平。樋口。次郎兼光。根井。小弥。太行。近和君の。おん母
 巴の方。數なり。後。とも。親。美。一族。岡田。小二郎。久美。信。越。加。北。名。た。る
 勇將。拔。擧。る。違。わ。ぬ。その。と。親。平。家。ハ。俱。利。伽。羅。堂。國。見。猿。馬。場。の
 堂。彼。此。の。陣。布。り。又。木。曾。殿。ハ。砺。並。山。黑。坂。の。北。の。麓。垣。生。の。八。幡。林。より。松。永
 柳原。を。後。ホ。一。つ。黑。坂。口。を。南。子。向。ひ。て。整。々。と。陣。と。り。あ。か。て。平。家。ハ。進。こ
 来。つ。て。両。陣。は。相。拒。と。五。六。段。ハ。過。ぎ。り。な。し。さ。さ。ど。の。山。中。嶮。岨。之。疾。視
 あ。そ。わ。ら。う。その。日。ハ。か。て。暮。れ。る。平。家。ハ。切。処。を。憑。こ。ん。敵。の。寄。り。と
 由。影。て。盾。を。敷。寐。を。枕。し。睡。さ。る。の。な。う。と。な。り。五。月。の。天。の。癖。か。ら
 腫。の。照。中。月。影。も。夏。山。懸。之。弥。暗。く。源。平。互。は。咫。尺。を。さ。う。神。出。鬼。没。の
 軍。機。微。妙。に。木。曾。殿。ハ。豫。こ。り。五。万。餘。騎。を。五。隊。に。こ。う。ち。牛。四。五
 百。頭。と。り。集。て。角。は。続。松。結。付。く。夜。の。深。る。を。ま。ち。あ。か。の。と。親。樋。口

兼光ハ捕まへり廻り林富樫を相具して中山をうち登るに律原一推
 寄せて大鼓を鳴らし具を吹立樹の下に萱下打建して墓目鎬を射させ
 関を咄と覆るよなん今井根井巴の方一萬餘騎を引卒して関を
 合せて進みつ一度は牛をぬけてあちて平家の陣へ進入せり。こまに
 田軍火牛の故事今又ある名將の謀合期して牛もろ共に突て入るその勢ひ
 破竹の如くさ一も平家の十萬餘騎不意を撃れて辟易し一柱もえはせ
 加賀國へ退やとて黒白も別ぬ黒坂の南谷を下るとて先陣深谷へ滾
 落せば後陣も繞て落累るをばらやあみと木曾殿ハ采配も揮り
 味方を進めて透間もなく追撃をば平家久馬弥をたたく或ハ劍戟は
 劈き或ハ巖石ようち碎きてさしも廣圀南谷を人馬の死骸も埋たり
 ざりよありこの谷を地獄谷とも呼做せり。この地一族太郎重義同小二郎

久義ホ比類かた働死して久義ハ平家の上將右兵衛佐為盛と引組て遂
 その尤も又重義ハ平家の侍館太郎貞康と血戦して矢庭は敵を撃
 とりぬ又某ハ逃るを逐ひつこの谷れなうゆく美濃守知度と半晌あまう
 戦やう乱軍のりわれば互は援る兵士なり。寄きや組んと馬乗あがへく
 利を取て無事と組知度ハ平家名々多力の猛將なるものなり。戦ひ
 屈して浅瘡を負ひぬささごの攬るる身を放さず採拉んと接あつ程は
 々々暗し切込なり共は疲勞きて馬さへ蹶定定なりがれば崖岸
 我破と踏こして両馬ハ主を乗せあがら千尋の谷へ墮と落まば久ハ鎧を
 踏外して組ざる隨は腦を碎き比彼齊一命を墮して名をこの高嶺の
 揚さるる小松の三位惟盛ハ越中前司盛俊上總介忠清ハ救せり加賀
 国宮腰佐良嶽の濱のほとりに残兵を集るものなり。あほ其処あり

溜りぬぞ睨て京より上まば木曾殿ハ逃るを逐めて平家を摂津州討
 走り。仙院を守護しされば上皇後白河院威感大なるに。軀て勸賞行は
 従四位の伊豫守朝日將軍は拜任し。左馬頭を兼させぬ。こゝに身後
 なまごも。死するものハ既ハ靈あり。冥よりそのを監む。又よく未来を知ること
 あり。あつて和君を木曾殿の娘に嫁せしむ。こゝを知りて。この物語は及ぶもの
 されば俱利伽羅の合戦は某が一族を第一の功とせしめられ。勸賞亦他
 超るまば絶て恨はなれども。いうせんまが刃をうるも。数万の敵ともろ共
 この谷底は骨をさらりて。三熱の苦を脱し。毛敵の怨灵八萬餘騎知度為盛
 大将也。夜毎は閻を揚箭を射せし。某を攻撃し。今に至りて十九年一も開
 なし。いで勇士の資はあつて。竟は出離の時なり。んと。そのとき
 まだ絶てその人よあはむ。苦く地年月を歴る。一時あり。く智勇

兼備の一壮士。志も奮縁大なる。なぬ木曾殿の落胤あり。和君がたり
 らむ。この山を薄暮む。踏みあはる。が乃百萬騎の躬方あり。地を
 づれ推取。卷く怨敵を切拂ひ。勢靡け。この谷底と跳出る。數萬の
 讐。なや遣トと。彼処まで。ハ追躡する。が和君の腰は帯あり。俱利伽羅の
 太刀。は憚りて。是処まで。ハ追跟ても。亦む。が乃敵地を脱離し。後
 地をぬん。皆是和君が威徳はあり。されば。を武士の敵。こゝを
 他所へ移ら。亦是。こゝをた取たる。その峯。ハ俱利伽羅堂あり。音明王
 千歳の滝の中より出現して。越の大徳は拜せぬ。大威徳の立場をれば。
 堂と滝との間を擇して。こゝが觸體を埋めてた。こゝに不動の威神あり。音縁の
 勇士の資を借りて。永劫阿責を脱し。ちん恰千僧。万卷の流経あり。其
 功德あり。今より和君が影は立て。その久後まで。衛する。こゝの志あり

さんぬは假姿を顯しう。努疑ひあふ。その声さう。如曇月を仰ぎて
 美秀はむむも嘆息し。原来和願。豫くやく。岡田冠者なるる。いなる
 所あり。均う。當時の合戦は亡父が智畧軍の進退瞭然として視る。とく。
 今更くうらにみれば親と面を對するあちして懐舊は堪ざるの。美秀不肖
 小して。いまだ成さず。身も亦薄命なり。墮を飼ふ苦や。和願
 既神靈あり。久後の吉凶禍福を巨細は示し。いふぞや。叮嚀は
 向きて親義沈吟トそれを示さん。難くもあは。後人の為は天機を漏せ。ハ
 固より冥府の大禁なり。但過去のゆを述べて後車の戒とせん。和君
 みづく。覆明して禍を避か。抑鎌倉の古幕府。頼朝。梟雄古今。互あり。
 初高倉宮の今肯をあり。下は美兵を揚て。むろ所絶て敵居。
 居あが。八州を併吞して。基を鎌倉。刺くとい。この自家の経營のよみ

ちて朝廷のちんを先よせ。忠勇美烈。木曾殿と日。を同して論を。うら
 ささ。又木曾殿。高倉宮の皇子。信濃の宮を主と。傳。祀。衛。を。の。こ。ろ。く
 義兵を起し。北國は苦戦して。平家の大軍を討退け。逃るを追て。上洛し。
 鳳閣の守護として。上皇の宸襟を。よくも休め。なり。その忠。その功。莫大。
 あり。小あり。官爵も大く。あ。進。ま。か。じ。上皇の。厭。短。く。て。文。も。な。く。武
 小も。あ。ぬ。鼓判官。お。舌。頭。迷。さ。し。果。木。曾。殿。を。憎。せ。ひ。て。奏。さ。す。由。
 用。ひ。み。む。臆。鼓判官。して。討。せん。と。企。め。ひ。り。堪。ん。僻。事。より。君。臣。銜。有。
 不慮の狼藉。いで。来。小。う。縁。由。を。推。さ。か。安。徳。天。皇。平。家。の。こ。ろ。し。都。
 落。さ。せ。あ。ひ。り。比。上。皇。は。此。彼。と。日。嗣。の。皇。子。を。え。ま。せ。あ。ひ。り。新。木。曾。殿
 ち。め。ま。の。り。し。く。信。濃。宮。を。と。奏。せ。り。舊。を。忘。ま。ぬ。忠。臣。の。美。理。の。賢。地
 諫言。頼朝。美。仲。東。北。より。美。兵。を。起。て。平。家。を。討。し。高。倉。の。宮。を。び

此のびよ。う。う。せぬ。一。件。の。宮。ハ。い。ふ。と。して。淨。海。法。師。齋。を。封。滅。し。
 上。皇。の。宸。襟。を。休。め。ず。ん。と。思。は。は。孝。心。より。國。の。源。氏。を。召。さ。せ。ぬ。ひ。
 う。ご。の。その。み。こ。も。漏。れ。し。る。頼。政。一。族。免。道。小。亡。び。宮。も。流。失。せ。ぬ。を。
 射。さ。せ。て。か。れ。さ。せ。ぬ。ひ。ふ。ら。う。さ。る。と。れ。る。頼。朝。美。仲。齊。一。起。て。海。内。を。
 掃。淨。せ。し。根。本。高。倉。の。宮。より。出。る。あ。ま。り。の。美。理。よ。り。せ。ぬ。信。濃。の。
 宮。を。淨。位。は。即。あ。ぶ。た。り。あ。る。よ。さ。は。な。く。て。多。岐。も。う。け。ぬ。安。徳。の。兄。弟。
 尊。成。皇。子。を。み。て。天。日。嗣。は。定。め。ぬ。木。曾。殿。の。憤。り。て。事。は。觸。つ。
 あ。ら。う。一。た。地。行。状。を。え。し。謀。叛。を。ど。い。ひ。や。り。て。鎌。倉。より。討。て。大。軍。
 範。頼。美。経。を。西。大。將。や。り。免。道。瀬。田。より。攻。入。り。ぬ。この。と。り。京。ハ。叛。り。
 躬。方。の。武。士。ハ。暇。あ。ら。う。過。半。故。郷。へ。つ。る。も。あ。り。樋。口。二。郎。兼。光。ハ。藏。人。行。家。を。
 討。つ。て。よ。り。餘。騎。を。引。卒。し。て。河。内。國。へ。赴。た。る。木。曾。殿。を。勢。千。騎。は。

過。び。勇。將。猛。卒。死。を。究。り。て。一。人。當。千。たり。とい。ふ。も。寡。ハ。衆。に。敵。し。が。く。て。
 免。道。の。隊。より。攻。破。ら。れ。京。師。の。成。を。失。ひ。つ。木。曾。殿。ハ。主。従。七。騎。粟。津。
 の。原。で。斃。れ。ぬ。ハ。惜。ま。る。もの。を。も。た。う。され。ど。の。軍。は。豫。々。院。後。白。
 鎌。倉。へ。木。曾。追。討。の。院。宣。を。下。され。し。あ。ら。う。京。師。ハ。空。虚。の。す。ま。規。ひ。
 鎌。倉。より。軍。を。起。し。て。猛。り。討。つ。上。じ。ら。う。も。武。衛。朝。の。武。運。微。妙。く。て。木。曾。殿。
 亡。び。ぬ。ひ。ら。う。と。云。云。の。院。宣。を。後。め。ど。な。し。か。つ。ら。ぬ。武。衛。朝。平。家。を。討。
 唱。へ。その。牙。ハ。州。の。外。を。征。せ。ぬ。夫。石。を。犯。し。て。平。軍。と。戦。ひ。し。絶。て。ぬ。ひ。
 木。曾。殿。數。度。の。苦。戦。し。て。大。敵。を。追。退。し。その。功。莫。大。あり。を。猜。忌。こ。言。ふ。
 仇。ら。平。家。を。さ。し。お。か。忽。地。同。宗。の。美。を。忘。れ。ぬ。躬。方。を。斃。す。あ。ら。う。は。し。
 木。曾。殿。を。異。し。て。木。曾。殿。と。不。快。の。を。入。會。合。戦。を。せ。し。り。り。の。
 つ。ゆ。そ。れ。は。後。に。頼。朝。ハ。嫡。家。之。私。の。怨。よ。り。て。朝。敵。ら。平。家。を。討。

何ぞ彼人と軍と起せしむる一身の爲と云ふも
 高倉の宮に送られしをまゝのりて偏上皇の宸襟を休めし朝敵を
 討滅して且私の讐を報ひしめは源氏累代の恥辱を雪んとすとのこ
 頼朝を疑ふ。これ頼朝を疑ふとなし。その後わが好むを結びて
 こが赤心を示ん。是れ嫡男志水尉者美高君を人保とす。鎌倉一
 遣いぬく武衛頼朝も流石は辭なきて長女大姫君を以て美高君に
 妻して一旦和睦整ふものなり。木曾殿亡びぬ。比女塔君を以て
 つ。人の子なるぬ姫うよ。多ひ死をさせし。あまうは奇刻に沙汰を
 乃狐疑ふ。死癖あるが賞軽くして罰重く小過は大功を以てひく
 胞兄弟を憐まらば果は奥の高館の判官。腹を切せ。又范頼を
 修善寺に幽殺して。あつ一家の扞城を失ひ還て時政美時を疑ふ。子孫の

うを憑れ。小鳥を養せ。虎は豕兒を托す。似たり。幕府
 ぞ。今僅よ三年中。政草の外戚の權重なり。時政幼主。頼朝を挾く
 遂は四海を吞んとす。功臣忠美を存せしめ。ハ渠が爲に滅されん。和
 美盛の忠直の武士ある。時政父子が敵を足らぬ。又彼尼將軍。政ハ
 漢の呂后より似たり。智術固より遅く。父兄の資ある。あれば誰が
 敵を乞。和君鎌倉に召され。職祿を受めし。君父の爲に謀を献す所
 ありん。只忠をなく。又美を乞。みづろ衛を移りぬ。世のそまひを
 新將軍。頼朝。和君の爲に累代の主君。あむ。和田美盛。和君の
 嬰襦。孝育の恩愛。薄く。室竊に諫め。用いられぬ。ち歎死つて。さ
 止。至忠至孝を盡さん。身を殺せ。君父は益なり。こが説と。後
 多ひあむ。今をぬれ。誘ひ。ひきて。馬に肉りと。乗つ

人魂のとき
たのむ君がま
まるとあへ
お衆はさひ
とせのほめ

朝ひを



俱利迦羅堂のうを投てゆくとも一ハ忽地は形ハ滅てかりたり。義秀は
 忙然と彼此をえらるる。觸髅ハ舊の如くありて又その人の影もせむ。夜ハもや
 初更の比ゆて薄曇なる月さよ朦朧とて出やむ。梢の木葉吹落を秋の
 山風凄しく溪澗の涼う添く。峯は北恋ハ牡鹿の声寤寐びびといふ。糸
 巖根枕片敷て叫ぶ。猕猴も、はく腸を断媒となるのこやして事問人
 よもがハ絶くあくる。且して美秀ハ件の觸髅をどうわけてつくづく
 といつ嘆息し昔人去く再びうへらむ。僅ハ枯骨をともえり。是ハこの親美
 その名々えし智勇の武士こその子孫ハ今もあやわやわやあやねる。
 こそを有縁のものともうく。觸髅をよもろのこあは過去来の物語
 あり。こがゆくまを滅し。言の葉みみ金玉あり。おもそ人の栄枯寵辱
 その差あやよ似たり。死して主ともあざりか。嗚呼痛むべし悲むべし。

請ふは任してその如く埋人とむらうごらう。堂のほろろ人赴く程ハ前面
 ありある行脚の女僧。綱代の笈を脊すく。錫杖高く衝鳴らし。行
 ぢみやうやう。背向ハ信と透し。て觸髅を取らんともうく。美秀ハ
 冷笑ひて拂除人とあつれざる。千引の石を推し。撓む去らず立る。形勢
 あり。ひねが驚と。しつ。そがま。左よみ。引つけて。拉んと争ふ。おなド
 山路を登り。身ハ禪衣被らう。一個の行者近づく。あま透し。て走り。鬼て
 件の觸髅を。これ。んと。黄縁。を。美秀ハ。かほ。う。と。く。あ。あ。う
 こと。と。を。反り。左右。を。柱。る。煉。の。剽。姚。こ。あ。こ。も。劣。ら。ぬ。子。速。の。峯。林。
 洲濱輪違。鼎足。跟廻。して。衝。之。され。拂。ハ。え。る。冬。樹。の。蔭。よ。り。の。こ
 ろ。薄。月。夜。時。移。る。ま。で。挑。こ。つ。て。三人。觸。髅。よ。り。あ。り。て。引。お。わ。ふ
 谷。含。み。より。お。と。せ。バ。觸。髅。ハ。石。よ。茨。夫。と。碎。け。く。隠。こ。と。立。沖。る。燐。火。よ

三人顔見ありき。そハ和子なるが母御なり。一三どのの紅葉ふらふ。これハ
 ちう。と西三步。遠巡して三方へ立退たつ。渚藤を齊一殿と拍音ふ。驚死
 覚く目をゆけ。是華晋国の一夢なり。俱利伽羅山よむ。死ふまで。
 明王堂の欄干は頬杖つて臥もかく。その夜を明も秀ハ身を起し
 つ腕を拵めて傾く月をうち仰た。秋の夜ながき比ぶぐ。途の疲勞は
 熟睡も多んを。曉がこよなり。あハ地名も俱利伽羅のこが腰。此
 威徳よめて。いぬる壽永よ討死せ。岡田冠者親美が怨敵の呵責を
 脱し。彌勝をこれに托せし。久後のよきよ。説示され。言の葉ハ
 みほ耳底よ留ま。夢と覚くも現の如し。加以曇る夜。融勝を取ると
 争ひ。斗敷の女僧ハ月来日ろなる。とあふ養母なり。たう。ちう
 一三と。異なる行脚の打拵して。共は挑こ。為体何の故も。い。ちう

がじ。是も亦親美が灵魂の所為なり。こが母ハ恙なく道心堅固。よ
 廻国も。とその形容を夢よんせ。秋泡沫夢。と浮屠家ハ説ぬ。悪
 む。足らぬ。ら。あ。ぐ。い。の。へ。五夢の辨。あ。れ。が。の。扱。り。と。い。ぶ。ぐ。い。と。ま。れ。ち。う
 まれ。彼。彌勝を。索。ね。ん。か。や。と。ひ。う。ご。ち。明王堂を。立。出。る。十。歳。満。れ
 う。こ。よ。赴。け。ハ。鮮。明。の。月。隈。なく。照。ら。し。て。差。裁。る。深。山。寂。寞。う。こ。ん。ん。は。が
 あり。く。る。松。の。下。は。物。し。を。あ。れ。と。立。よ。れ。ハ。果。して。一。個。の。彌勝。あり。と。る。と。あ。げ。て
 熟。視。る。よ。夢。よ。ん。つ。と。相。似。う。是。ん。ぐ。り。と。感。悟。し。つ。試。す。よ。の。融勝。を
 他。所。へ。移。さ。ん。と。ま。る。と。き。ハ。その。重。た。し。磐。石。を。抱。る。異。なる。代。舊。の。処。へ。お。て
 う。せ。ば。その。軽。き。こと。木。葉。の。如。し。原。来。の。樹。下。へ。埋。め。よ。と。その。示。現。あり。と
 更。に。曉。ま。る。く。溪。洞。あり。竹。を。伐。して。土。掘。り。し。地。を。掘。る。と。五。六。尺。件。の
 彌勝。を。瘞。り。つ。ほ。う。う。近。き。立。石。の。大。た。あ。を。輾。し。よ。せ。て。又。推。立。て

墓石がせき一い。墨斗すみすの毫こを技わざ出だし。岡田おかた尉ゑい者しや親おや義よし之の墓はかと一行いっぎやうの書かきつづく。樹この條じょうおちて向むかつ。俱利伽羅くりにがらのとち大おほ刀やいば引ひ技わざて南谷なんがのとち疾はや視みつづく。朝夷あしや三さん郎らう美み秀しゆとよあり。朝夷あしや三さん郎らう美み秀しゆとよあり。平家へいけの怨うらみ灵たま迷まふ。退散たいさんせ。とよく。伐き攘じやうふとよ。數かず回まい又また也なりをよ。輕かろよかさりて。石いし傍はたをよ。拘かひて。歟やに明王めいおう堂だうよりより。且かつく。祈いの念ねんする程ほどは。天あまのとち明あきるかて。碓す並なみの嶽たけをよく。婦め負おの黒川くろがわまでまで来きるか。死し一いつ三さんがらのそとなり。觀音くわんおん堂だうへまるか。よあひぬぬ。當あた下した一いつ三さんハハ高たかやらにあひけくく。遠とほくく走はり近づき。三さん郎らうぬぬ。ならどと。遲おそきや。友とも鶴つるのあひもさらりあり。あらどと夫つま婦こがまちびてきのあも日うじおん身みがらのものひ竭つきさらりある苦しく。女め異いのき歸き郷きやうをい祈いのらんる。どが心こころくく黒川くろがわある馬頭うまがしら觀音くわんおんへ借りく。誘いざなふとのそぐせハハ美み秀しゆはうち微笑わいせう。彼か佐さ味み竺ぢく内うちハハ小こ松まつは在らむとあり。

つも。彼かれまでゆく序はな名な所しよ古こ蹟せきをいんおめとてあひ起せし旅たびなし。ババ。待まちりまで日をあげる。某たれゆゑよ老人らうじんのまちく。多おほ物もの詣よハハ罪つみをあ深ふかくうち賠活ばいつこれあり足のつ運はびを早はやめて。うちつれ立たち還る程はあらま再またもあらず。昨きのう夕ゆふのあ夢ゆめよこの一三さんが禪衣ぜんいを被りハハハみそうくどあひまりる。觀音くわんおん詣よのとりさよ彼我われゆゑあら祥さかあり死余あらハ母ははも恙多おほ。今いま鳥とり廻まわり疑ひかしと憑よりく。あらみのころ心こころをつよ收めて人ひとのあ告つぐらう。さよ日のあ昏くみ一三さんより共若わか神かみある宿所しゆくをどえり美みぬらの夕。園う宅たくの奔走ほんそう友とも鶴つるが飲びの為ため人ひとの問答もんたうさへ。精せい細こよ写し出さんハハハくレたまさあんの一いつ條じょうハハ省しやう略りやく却かへ悦えつ今いま茲こゝハハ果くわ敢かんある墓はか。あら璞はくの年立たちり。建仁けんに二に年ねん二に月げつの天稍しやう長ちやう閑かんなり。ハハ美み秀しゆハハ又またさらハハ行い装さうを整く。下野げのへゆくハ當あた下したあるト判はん五ご夫ふ婦こハハ一いつ三さん

共侶練るや下野の敵地之彼刀野太郎とやうに謀るも其身を害
 せんと思つるよしとバ豫てぞ支ぬや吉見は良友ありとも其は
 知已ありあはれ父母兄弟もあやのあはれ後防でも更ハ缺き
 がくてもあれと辭齊一禁むれば其秀で頭をうち掉支鶴も
 きのふよりその身をのまうけ之況て老る人みあはれくあ
 るともありあはれ然るに仇をもちて前緒は背んとはがせ
 る所時夏あはれ後謀るもそれは其邦井平ホが賢あり何
 ぞかた大約は度の任歴ハ吉見を訪人ぬのともあはれ
 夏は其が養父の大祥忌辰は相當なり舊里へはは憚りあは
 れ下徳よ赴たて許我の間中寺あり墓ありて師恩を謝せん
 とあはれ豫てあはれいひた吾倚ハ一所不住のものと男子
 ハ四方を家とほといふやいづれの

地とそるものゝん形いふをあはれ地は後者あはれ沙汰あり
 りいづり厄は遇ふとあはれも後者ハ足廣縁中を却てが
 られその身を念ひはあはれく自愛あはれ徳と統倫しつ
 後ハ再々禁んよもなく衆皆嗟嘆あはれる且くして判五が妻
 ハ備は侍る友鶴と見えあはれあはれひさるものゝち
 又上坐ハ小際をせめ三郎阿月はあはれあはれあはれ
 ありあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 有身之帯も程ありあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 ちやうハ季春の下幹遅くも西三月ハ信れをいふは過世
 心も縁一を結びけられ心もあはれあはれあはれあはれ
 うち任せゆひぬ愛顧よあはれあはれあはれあはれあはれ
 友鶴も如此あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

忘るるも母の後方より退却して坐す涙さしぐさなり。程は美秀の心づき
 只ひとり。若神を首途して日よ歩之夜は宿も九夜十日と旅宿をたねて
 先下総中を起たる。翌六師の七日とす。その日よ許我よ去る。間中の
 野寺へ詣つ。先師の一周養父の三回。かゝる寺にたゞとゆひし。其
 老僧よ云々のを告て布施駈きて。其が軀て近郷より法師を集めて。諸
 徑を繞ると二夜三日よ及びたり。こゝの雜費ハ縮向判五。豫て買つ所
 なるべし。追薦の法會果はなれば。美秀ハ秀作が墓に詣て別を告遣
 安房のくもを拜して。養父の菩提を祈る。許我よ相識る里人およ
 送られ。野木の驛をく袂を分ち。ひとり下野へ赴く。程は煙あはる
 孤邨の柳紅あき。田家の桃世ハ日よま。く暖た去歳のその日。彼
 ころよりあり。足利へと起行くる。弥生の比よあり。よなり。

作者云義秀ハ鎌倉より生ま。安房の人とす。仇を撃亡命して。圖
 らむ下総の許我よ寓居。更下野足利より。字投入。人として果
 さに加賀の小松に赴き及び。不憶り越中なる。巖神の杖と駐め
 舊故の竭。美婦を娶。處ると僅小暮月。追下。又下総
 旅宿して。師と養父の年忌。吊ひ今又足利に赴き。再友を
 訪人として。壁を過海の船の港。湊に歇る。如く。その居る野久。と古く
 如みる。やと。或ハ蛇蝎觸體の怪ある。或ハ怨讐山賊の。あり。とて
 地上の風波小惱する。かど。義秀建保の役。敵破。上。圍を出海。海
 こそ。を。と。ち。ち。弱冠。浮浪の為。体。亦。嶋。め。ら。と。い。は。

初輯第六

苗頃時の濁水
 客去雁の春霜

吉見冠者義邦ハ曩ハ義秀乃小別也。比并平也亦その主なる時夏不
 召又さす。主後とも疎隔するに彼を召ふとさふ人ハ靴を隔く
 癢を搔く。あちのときあちのとき時夏不憚り。坊よりとる年暮て
 誓下の梅小鶯の来鳴く朝の八重霞里より雪ハ消初と。遠山も稍春の
 多ふんを弥生ハ近づく。加北より下とびと義秀が信望えどいふ
 々小と想像る。山河百里を隔て言告申入便宜もあがる折陸奥
 へ。按察使藤原泰衡が残党大河太郎兼任が子。修羅五郎經任と
 いふの竊み先亡の餘類を集く。厨川の古城に蜂起し伊豫判官義經
 のおん子と稱しと。逆意ハ奮ふより粗そのゆえあり。彼藤
 原泰衡ハ鎮守府將軍泰衡が子なり。いぬ文治五年夏四月泰衡ハ
 父秀衡が遺訓に叛きて國衡と相継り衣川の城を攻め判官義經
 首級ハ鎌倉に送る。せき恩賞ハ乞ける。その沙汰ハ及ぶと曩
 への泰衡皇命を蔑如して荷擔する。その罪を輕くす。今
 さう轉て出さむ。許さむ。あつと幕府頼み。大軍ハ
 奥州に進發し大因山に國衡を殺し。糟部ハ泰衡が頭を獲ると合戦
 僅ハ九日ハ過ぎ。陸奥出羽二國平ぬ時ハ秋九月なり。こち建久元年
 の春二月泰衡が家臣大河兼任謀叛する。膽澤郡平泉の柵に物
 推のえし。千葉ハ常胤比企判官能員亦追討の將命を兼平泉に推
 上せし。遂にその柵を抜き逃る。追ひて栗原より兼任と怒とあつと
 長より奥羽を異し。属し。今に至る十二年白波ハ風騷。緑林
 條を鳴き。又經任が及逆のゆえあり。現この比の風聞ハ件の經任
 ちが軍用ハ充ん為る。多く野客山豪を相譚く。近國ハ遣官物

月見二編卷四

を盗とせ民財を奪とせし。こゝに所屬川の柵に積貯へ進むとたゞ數
 郡と畧し退くとたゞその巢を成るの謀をたるとし入さざるも。岩崎
 菊田白川よりこゝに常陸下野の間まじり人のあつる長雨よりどちめく戸濱と
 固く賊を御ぐを致とせり故あるまゝいぬる正治二年の冬十月鎌倉より
 頼家卿後三位の叙し左衛門督に任じりて去年正治三年即ちの春正
 月足利より拜任賀儀の綱物併に義兼の舅執權時政への贈りの金浪珠玉
 武具巻絹ると數の小舟駄小附のりて鎌倉へまゐりせり。ゆくゆくは
 つくづくもあつてその曠昏に披野の船橋をこゝををり數十人の瘠者出て
 義兼の使者某甲を破ころし。輕率奴隸馬奴ホを奪走しし物残アヌ
 奪とせし。踏込暗したる。未嘗有の珍貴なるは義兼愚將
 あつた。外圍を憚りし。この鎌倉へゆきおげど怒り押へ恥ぢ忍びく。

再び彼遺物を舊の如くとせし。數の氏より宰領させ鎌倉へおのせし。
 この比より郡監目代義兼の密意を養ふ。あつては、數兵を部し彼盜賊
 等を捕入とて。間々の時よく穿鑿せし。小治とてその所在とをたゞとせし。
 とも民間より盜るものあつとて人々を警衛せし。はかく今茲
 建仁の春小治とて。経任がりのゆえに。入會更に罵り騷き。原来件乃
 偷見へ終羅五郎が餘類より入里人ふらち雜せし。とて。あつ入致し
 互はあつた。あつて。不問。足利の郷より遠く。ぬ。梁田郡
 賊を擲捕るものあつ。數の賞錢を賜へた。人を益の雜談とせし。書
 つく。里毎小掛させし。賊へは。是れ。他郷へや。移り。去る。人。街。談。巷
 幾。あつ。と。ぬ。こ。こ。よ。よ。と。義。邦。の。長。秀。を。訪。せ。し。と。去。歲。より。加。北。へ
 鳩。便。の。と。び。ひ。る。が。小。黙。止。し。り。不。題。足。利。の。郷。小。後。遠。く。ぬ。梁。田。郡。

赤貝の莊容ふ春田の苗四郎といふめあつてける。その子藁二郎といふめ
 年よと吉見はあつて。美邦の仕へ。畊作のふ管つて。と真成つて
 めつた奉公年来より。この春身の暇をとりて親里へ還つて
 その代の小断とて。後方とける。鳴子の引太郎といふめ。吉見へ
 約束をきこも。頃と如月のまゝ。田と鋤畑を
 うつふとて。そのる。果さまで。二月の節供より。この日親苗四
 郎へ。吉見へいひ。いと。任の引太郎は。髪結せ。洗をえ。布子と被せ
 古の衣葛籠と畏の鶏卵を。こは。熟酔臥する大漢。あつて。立ちあつて。ふ
 忘野の小松。下。推芝を。熟酔臥する大漢。あつて。立ちあつて。ふ
 その面。瘰癧あつて。野客より。このと。引太郎は。伯父の袂を。密と引く。
 一及あま。退れ。指して。耳。彼。酔客の。偷児。いぬ。比。村。ま

物。畧。走。る。面。貌。と。あり。伯父。公。何。と。見。あ。ひ。る。彼。奴。が。夜。乃。蔽。こ
 う。不。似。が。る。懐。と。頭。と。出。る。法。十。倍。は。あ。ま。と。ぬ。瘰。癧。者。る。と。と
 誰。の。ふ。べ。偷。児。を。捕。る。の。の。數。の。賞。錢。を。多。り。比。と。守。あり。狗。を。多。り。び。や。
 吉見。殿。へ。見。糸。の。牽。生。物。は。彼。奴。を。捕。く。お。り。う。え。索。の。准。備。を。き。り。し。と
 ま。ろ。ゆ。白。は。相。澤。へ。苗。四。郎。院。吟。う。汝。が。較。計。し。と。い。ふ。も。醒。る。毛。と。吹。き
 疵。を。求。入。再。ひ。え。よ。と。密。浴。へ。引。太。郎。へ。使。あ。つ。て。行。で。ふ。さ。う。り。え。吾。侪。り。手
 栗。相。撲。ぬ。村。へ。二。を。争。ふ。め。伯。父。公。の。老。て。も。助。骨。剛。ひ。お。さ。え。と
 索。を。被。ん。と。宿。鳥。を。と。る。易。う。り。と。い。ふ。が。苗。四。郎。点。ひ。て。引
 太。郎。が。脊。負。う。葛。籠。其。其。あ。ら。せ。麻。索。を。引。解。れ。と。い。ひ。て
 方。よ。後。方。より。近。づ。か。く。楚。と。あ。え。起。ん。と。ま。る。奴。起。し。も。立。き。合。は。し
 搦。え。足。を。捉。へ。引。倒。し。て。索。を。被。る。と。ける。瘰。癧。者。ハ。搦。め。れ。て。睡。と



苗四郎
殺等
殺時
五頭平
謀



刀

早

早

共小醉へさめ人眼を睜し苗を切りと怒れどもその甲斐あるを罵りてその
 詮を阿容と追まゝて吉見のうへ牽きゆく浩然と刀野太郎時夏を
 春の日消し花をさぐりて遠騎不出と人馬奴ハ道不戻と井平郎
 後ひつ途のゆて不幸とある癖者ハ眼をつけ足掻を早えく同辺へ
 入小の癖者ハ豫く相藏る早蠅の五頭平るると不驚先聴く声をけ
 縄より男を吸ひとめくその故を問うハ苗四郎ハ引太郎共侶忘野の芝生
 少く癖者を搦捕る。為体を物ぐる。又牽立くゆ人とささど。時夏
 声をいじり且く等と吸びえ。馳く馬より飛下り。袴の皺を伸しつ。
 又苗四郎より対ひ汝ハ脾弱き土民と。この癖者を搦しつ。その功
 あり小池と。この這奴解臥る折る。素波らと。こののうへ。り中途
 ちく素波断はホをもち倒し。逃去る。由倒り。これハ刀野太郎ハ執槍

の縁者。この當領主も疎く。よた小計ひゆる。癖者をこの一處にせ
 とのひつ。やとえより人とま。引太郎ハ冷笑ひ雅人もをり。ませ功名。が
 ちぐちえ僕ハ管伯父を勧めく。搦捕る癖者をえ。その一處と
 りハ。苗四郎使男よ。連やうし。吾們ハ吉見殿。由縁のめ。くハ
 こ。其れへ。彼刀拵。進ま。庄客。ハ。と。ね
 堀垣の朧結。叔儀の締括。縛く解る例ハ。遺ハ。の
 日ハ。纏り。と。せ。い。ハ。引太郎。目を注。立。人。時
 夏怒。肩。面。忽。地。火。の。如。く。過。言。り。土。民。們。其。知。る。退。れ。と。抜。く
 手。大。く。丁。と。撃。つ。る。大。刀。風。ハ。苗。四。郎。ハ。肩。尖。四。五。寸。破。く。と。苦。と。叫。び。あ。へ。と
 仰。さ。る。小。仆。ハ。引。太。郎。ハ。驚。き。さ。る。が。い。そ。う。く。葛。籠。ハ。あ。ら。う。癖。者。と
 うち捨。組。と。人。と。近。つ。知。久。時。夏。ハ。か。を。刀。小。乳。の。下。ろ。く。礮。と。破。る。火

所^ある^まと^との^ま血^け氣^んの^ま壯^さ伎^ぎ塊^{たい}礫^{れき}を^か撥^は觸^ふく^ま。頻^{しばしば}に^か死^しな^るを^う打^うく^ま。苗^{なえ}四^よ郎^{らう}も^さ刃^{やいば}を^か引^ひく^ま。起^{おこ}す^ま。倭^わ僮^{どう}あ^らは^せる^ま。時^{とき}夏^{なつ}が^あ後^{のち}あ^らは^せる^ま。と^あ組^{ぐみ}む^ま。左^{ひだり}の^う又^{また}振^ふか^す。足^{あし}と^あ死^しな^る。丁^{ちやう}と^あ蹴^くる^ま。蹴^くる^ま。撞^つと^あ轉^ま。轆^{りく}へ^ば五^ご頭^{とう}平^{へい}へ^ば背^せの^う身^みを^か壓^{おさ}み^て。動^{うご}せ^るま。苗^{なえ}四^よ郎^{らう}が^あ背^せを^か楚^そと^あ踏^ふ。躪^ふ躪^ふ。身^みを^か壓^{おさ}み^て。動^{うご}せ^るま。その^ま隙^{ひま}に^あ時^{とき}夏^{なつ}の^あ眼^{まなこ}を^か引^ひく^ま。引^ひく^ま。太^{たい}郎^{らう}が^あち^かか^か。石^{いし}を^か礫^{れき}と^ああ^らは^せる^ま。あ^らち^ちち^ち。刃^{やいば}を^か反^ひり^て。踏^ふ込^めて^は又^{また}下^{くだ}大^{たい}刀^{たう}。臂^{うで}の^ああ^らを^か破^{やぶ}つ^て。と^あ叫^{こゑ}び^ぶと^ああ^らは^せる^ま。あ^らび^びせ^るま。砂^{すな}を^か礫^{れき}と^ああ^らは^せる^ま。時^{とき}夏^{なつ}の^あ眼^{まなこ}を^か引^ひく^ま。あ^らは^せる^ま。醫^い居^い小^{せう}横^{こう}地^ちと^あ坐^まる^ま。透^{とほ}ぬ^るま。引^ひく^ま。太^{たい}郎^{らう}の^あ慌^{あわ}忙^いき^まを^か起^{おこ}す^ま。腹^{はら}を^か引^ひく^ま。と^あ前^{まへ}より^あ馬^{うま}の^あ懸^かり^て。と^あ衛^ゑと^ああ^らは^せる^ま。井^い平^{へい}の^あ衝^つと^あ出^でる^ま。立^たち^ある^ま。寒^{さむ}い^ま。と^あ刃^{やいば}の^あ光^{ひかり}を^か引^ひく^ま。引^ひく^ま。太^{たい}郎^{らう}が^あ首^{くび}の^あ地^ち上^{じやう}に^あ落^おち^るま。時^{とき}夏^{なつ}の^あ禁^{かぎ}め^るま。一^{いち}の^あ涙^{なみだ}と^あも^もは^せる^ま。眼^{まなこ}中^{なかに}に^あ砂^{すな}を^か拭^ぬぐ^ま。引^ひく^ま。太^{たい}郎^{らう}が^あ首^{くび}の^あ地^ち上^{じやう}に^あ落^おち^るま。苗^{なえ}四^よ郎^{らう}が^あ前^{まへ}に^あ咽^{のど}を^かせ^るま。刺^さす^ま。且^{かつ}彼^か此^こを^かこ^ろへ^るま。小^{せう}太^{たい}郎^{らう}が^あ引^ひく^ま。五^ご頭^{とう}平^{へい}も^あ引^ひく^ま。

平^{へい}が^あ索^{さく}を^か断^き。釋^{しやく}も^あを^かく^ま。血^ちを^か拭^ぬぐ^ま。納^なめ^るま。彼^か死^しな^る。末^{すえ}を^か指^さす^ま。五^ご六^{ろく}町^{ちやう}乾^{けん}ある^ま。茂^{しげ}林^{りん}の中^{なかに}に^あ退^ひけ^るま。井^い平^{へい}も^あ馬^{うま}を^か牽^ひく^ま。そ^のう^ち三^{さん}人^{にん}。樹^{じゆ}陰^{かげ}に^あ集^あ合^あぬ^くま。刀^{たう}野^や時^{とき}夏^{なつ}が^あ癖^{くせ}者^{もの}五^ご頭^{とう}平^{へい}を^か救^{たす}ひ^て。縁^縁故^こを^か尋^{たず}ね^るま。彼^か修^{しゆ}羅^ら五^ご郎^{らう}經^{きやう}任^{にん}の^あ奥^{おく}の^あ膽^{たん}澤^{さく}に^ああ^らは^せる^ま。野^や客^{かく}山^{さん}豪^{ごう}と^あ近^{ちか}國^{こく}へ^は遣^{つか}は^るま。就^す中^{ちゆう}下^げ野^やに^あ結^{むす}城^{じやう}朝^{あさ}足^{あし}利^り織^おを^かも^のう^ちて^は。乃^な方^{はた}を^か引^ひく^ま。早^{はや}蠅^{せう}五^ご頭^{とう}平^{へい}と^ああ^らは^せる^ま。小^{せう}賊^{ぞく}副^{ふく}て^は去^さ。歲^{さい}の^あ冬^{ふゆ}より^あ當^{あた}國^{こく}へ^は遣^{つか}は^るま。遣^{つか}は^るま。結^{むす}城^{じやう}固^こく。忠^{ちゆう}美^びの^あ武^ぶ士^し之^の弟^{てい}。兼^{かみ}時^{とき}政^{せい}の^あ女^{むすめ}壻^{むすめ}なる^まを^かも^のう^ちて^は。密^{みつ}意^いを^か通^{とほ}せ^るま。一^{いち}の^あ只^{ただ}刀^{たう}野^や時^{とき}夏^{なつ}の^あ執^{しやく}権^{けん}の^あ録^{ろく}者^{もの}なる^まを^かも^のう^ちて^は。娼^{せん}酒^{しゆ}の^あ為^{ため}に^あ志^しを^か投^なぐ^ま。利^りと^ああ^らは^せる^ま。誘^よひ^て。動^{うご}く^ま。易^{やす}に^あ定^{さだ}ま^るま。告^つぐ^ま。の^ああ^らは^せる^ま。五^ご頭^{とう}平^{へい}も^あ引^ひく^ま。遊^{ゆう}学^{がく}の^あ渚^{しよ}生^{せい}に^あ打^うち^て。時^{とき}夏^{なつ}の^あ面^{めん}渴^{かつ}して^は種^{しゆ}の^あ遺^い物^{ぶつ}と^あの^あ心^{こころ}を^か樂^{たの}し^むる^ま。譚^{たん}の^あ厚^{あつ}く^あ交^{まじ}り^て。遂^{つい}に^あ件^{けん}の^あ機^け密^{みつ}を^か告^つぐ^ま。時^{とき}夏^{なつ}の^あ一^{いち}淺^{せん}と^あ及^{およ}ぶ^ま。愉^ゆく^ま。諾^{だく}ひ^て。

う五頭平まゐく物を贈てをりくは催促せり。さつどかろ一大事を。
 輒く謀をまよしなるは時夏進退究りて推辞んと欲せしが既駭の
 賄賂を受くは今さらうは辭りあむむが另八年來時政の資を蒙り又
 義弟の蔭に立ども傲るめ癖あり物として足るをなく貪りて飽ること
 せむ。いふ不良の心蔑りて信とあひつくとあれが竊に五頭平を招たよせ。
 うひての一錢等兩にハあねどあくる如く足利家の執権の女塔も密を
 告て相譚とけけいけいもあひけり。言下ハ口より出き後とびハ百遍悔ひ。
 千遍悔ふも及んや。よけて今又一錢あり。筒様とて耳を引しを彼拜仕の
 賀儀として夥の貨を馬に負し足利家より鎌倉へ進まる辭の趣詳よ
 説示せば五頭平ふらく欽びて茂足の子路次の方位問定め謀をあせて
 俄頃小賊を召集め今茲正月の下流挾野津に埋伏して併の進物を

棄つと。時夏も配分して小賊を他郷へ走らせその身ハ姿を窺して。
 かね足利に苗とく再て便宜を窺み程この日づく沈酔して苗四郎も
 搦られ辛く時夏を救れり。間結休題當下時夏ハ掖の株を尻をうけて。
 五頭平を招た近づけ和主をく大膽なる挾野津の一錢より追捕せ
 ませ最重く四境ハ駭あり。これ一旦ハ救ふといども落し遣ふは路
 かり。和殿いふくともあざるやといはれく五頭平頭を搔死酒この刃を
 忘野の芝生に霎時解臥して土民の爲に搦られ。面目も死趣舎あり。
 國の四境に守兵を置き用心かくの如くあむ。わがわがして脱去るべ死謀を示し
 めい他事なくいハ時夏いふを又記して沈吟し。辞既あふ及ハ苦肉の計
 なくで又救ふたうもなし。これ且和殿を縛り足利家へ遞与し。然る
 と此の四境の守兵も罷れんと疑ひ。その守をたし及びて獄卒に錢を遣て

目代八嶋室平は賄賂のく和殿を救ひ半文の八嶋室平は某と文鳥を
 絆を謀るは便宜の友に和殿一旦獄舎を繋れその支黨を問ふと死な吉見
 美邦が汲引ゆく鎌倉殿へ進せあふ賀儀の貨物を棄つるぬ美邦は
 豫てあり。経任は同意せり。是こそ其の亡父範頼の志を報ん為なりとそ
 當國小への外は内志の武士なし。と真あやうは首伏せば美邦搦捕れ
 めんかくて和殿ハ獄屋を踰闕隙を潰く脱れ去るも。美邦の料
 重たまりて和殿の追捕ハ緩やうなり。この外ハ施せべき謀絶てか
 後進なバ幸ひなりんと真実ごちて相後ハ五頭平咬てうち点取寔は危地
 計略あまざる。萬死をせり一生を保つとあれらよあはれいぬごとく人々の
 うくも計ひかへと立地は落ひく。時夏竊は歎ひて。軀く五頭平に索せ
 被て甘平をを招たる。このと死媪子甘平ハ一死あまの退たきぬくる

杉子馬を繋ぎまぐる草を折敷く密談を洩きくぬ。あはれ
 ちまき召も隨志もあむ主の母とく本よまふ。時夏莞尔とち笑て泣
 る。密謀をたぐるな。ひつりんと所存あふいへとい。甘平擬錢を気色なく
 否。其声の低りしう。決定ははとやいむ。何するや。と問ふせば。時夏あま
 うち笑て泣く。汝ハ去歲の夏の比美邦許をうらむ。心ゆとなく。あひり。其
 存あるとなく。進平のとならば。曩ハ主の意中を察して逃んとしたる
 莊客を一步の走らせむ。替苗一り賞せし。あれはうらやあむ。りも。し。其
 疑ハこの五頭平ハ志のびく。よ。宿所へ来つる。め。之。認。り。と。ぞ。あ。ん。む。ん。
 この儘目代八嶋は遞与をハ更は救ひ出さへ。為。之。絆。の。あ。ろ。を。ほ。さ。う。と。の。想。
 と口を緊め。五頭平が繩をどく。樹下は立。り。つ。み。づ。ら。う。馬。を。牽。引。し。て
 閃々と乗。り。足。掻。を。も。め。を。ま。く。八。島。室。平。が。宿。所。へ。赴。死。呼。び。け。軀。を

あつたに對面し某々すも遠騎して之を志野のほとりて人を殺し
 物を畧る癡者をしてばはる色一がく主役二人踏込で生拘つその本意を
 責問し渠ハ原是修羅五郎経住が間諜者之當国吉見ハ内応の力
 あまば安を窺ハ排廻してそが便宜を誤といへるハ輕くざる罪人を
 掃宅子及むねおれ宜披露夫をわへると言姿を告ぐが室平大さ
 歎びて夥兵して彼癡者を縁類近く牽居させつりく視るは面魂現尋常の
 めのみあつたその名を問ハ五頭平と名告ぬるまで鞠問をせられし且獄舎へ
 牽立させ時夏を勞ひてその武畧を稱賛しその領主は披露せ必鎌倉
 上達せしむるその勸賞ハ本領をくへり召出されぬと更踵を
 旋せり流師任も亦和君の力力を竭して提擲べし吉左右を俟たしと
 いひし時夏喜悅は堪む小膝を進めり刑終一日西山は傾く比室平に

別を告井平をゆる還る程は忽地馬を駐めて頻り後方をけんし
 井平はもやあはれていそぐ走近つたその時夏声を低りし汝を
 何とぞ名彼二之の下郎奴ハ何知りなるものありん今さらその名を問ハ
 由な汝ハ再び彼れへ赴け彼風声をきくとわづ走とてを告彼奴が
 親族里人ハ死骸のほろも集合ん吉見は由縁のものとそのつづりしは
 なる人なりとせむの心もたれ所あり宿所ハ程遠くはれハ騎せし
 んむとくといそがせバ井平ハその中の天の祐と歎びて一淺及む領主
 死ぶとくよ去まバ時夏ハ馬を早めくもの宿所ハゆる吉見尉者
 義邦ハくるべしとハあるよもなく三月の節供は紙離の立つを如く
 小松の信を心よまきバ廣光と美秀がものをとやあんとくやあんと想像つ
 瞻仰る天子幽下三月の月その黄昏はひけかく井平がまつは淺良井が

告一うバ美邦主後河たながう。軀て刑室は招妃入す。廿廿平ハか海端だまむ。
 浅良井がまきゆる。一碗の湯を飲竭して。をいめく吻と息をつき後方をる。ま
 美邦のほろ近く声を密ま。猝急かれ安否を訊ひ別後の情を速に及ぶ。
 その故ハ箇様々如此のりあり。と嚮ハ刀野時夏が志野のこやこぞ。五頭平と
 以癖者を生拘束つ。莊客二人を砍殺せ。緯の趣又五頭平と相謀りて美邦を
 陥し渠を救んと。奸計その顛末を告る。なへ美邦主後うち驚き或恨
 或ハ怖れ膝をよせ額を合い。いふせま。とあひつて謀を向ふ。廿廿平を
 あむ。三十六計走ると。今宵竊ハ他郷へ走ると。危殃を避ぬ。身命は利か
 子も。犯人既ハ名を指く。云云といふ。たハ陳謝の詮あること。加以目代ハ鳴ハ
 時夏と交り。篤領主ハ執権の女督あま。時夏を疑ふ。還て犯人を疑ふ。
 又彼莊客枕をたむ。命を其処ハ隕せ。六堆その真偽を諦せん。河の

潔白を憑りバ危く蹤を暗せ。却やま。曩ハ告ま。せ。如く某時夏
 真の家僕ハハを且く。これ後よめハ勢ハ已と。をばされ。且その人とあり
 狼戾野心主と憑む。足され。脱れ去ると。去歳ハ六月朝夷
 ぬ。を郊外ハ送。一日共。この地を去む。と。あひつる。彼ぬ。如此と。諫れ
 尉者のお。留り。ハ。難。き。時夏ハ利ハ誘。て。恩。受。ハ。叛。き。逆。賊
 経任ハ一味。て。その支黨と。角。と。比。領主の調頁を。集。畧。せ。尉者ハ。陥。入
 と。も。衆。入。を。ハ。欺。く。も。天の網ハ。脱。れ。と。今。な。り。は。な。り。これ。を。あ。り。つ。後。ハ
 と。此ハ。賊。徒。ハ。君子ハ。渴。され。も。盗。泉。を。飲。む。廉。士ハ。嗟。来。の。食。を。受。中。是。こ。が
 去。る。き。時。至。ま。う。幸。ハ。て。棄。ぬ。む。ハ。尉者ハ。後。ハ。身。を。て。身。を。脱。れ。ん。と
 あ。の。と。妻。時。も。猶。豫。ま。う。ハ。起。行。の。准。備。あ。く。ま。ほ。一。某。を。あ。の。の。と
 告。ま。ぬ。く。せ。ん。と。あ。お。時。夏ハ。莊。客。が。尉。者。ハ。所。縁。あ。る。の。と。い。ひ。つ。る。の。と。あ。て

その名をきくぞ宿所の定りありき。あまのつゆをきくやけとて途より又
 某を死骸のほろり遣し。稍黄昏となりしう。天の祐と竊は欽び彼れ赴く
 おもひて歩道を走ると瞬息は危窮を告ることをゆるう。方は是神明
 佛陀の冥助よこそと正首は意中の機密を脱示せば異邦主は感佩し
 霎時嗟嘆の声を絶む。さるをも彼癖者五頭平とや。人を生拘りて時暮
 殺され。そのれ共ハ誰やあん。あまの由縁ありしに。受けバ殊更不便
 彼れこれと主後がどいもか何定り。さるも分さへ有也。世也の関をなす
 縁類の雨戸をさるると引開て殺され。親と後方ていとひひり裡面よ合
 めあり。倉鷲たて色を失ひ行燈の灯口より向て。晴を定めくつろく視る。よ
 便是別人か。むいぬる比羽の暇をて。赤白の御より。藁二郎あり。これハ
 いちや再び果して面を見あ。ハ。めい。を當下藁二ハ雨戸を引開端折る。

裾をかりて。潜りう。進み入。刀柄。このと驚。死あ。僕。竊。は。あ。ぬ。り。り。
 おか。ど。ま。あ。る。一。様。は。ま。あ。り。親。を。い。苗。四。郎。八。徑。の。引。太。郎。と。い。ふ。の。を。當。家。の
 小。斯。よ。ま。あ。り。其。を。そ。れ。を。お。て。看。所。を。半。ハ。色。の。比。及。よ。い。久。お。る。よ。忘。野。の
 ほ。ろ。り。を。二。人。と。も。二。砍。殺。され。と。そ。や。も。告。る。め。あ。と。バ。僕。哀。傷。悲。歎。堪。む。
 村長里人共侶は走りぬて死骸をみる。領主の目代八嶋河の郷兵もあつて。
 此彼と展覧し。僕も示はせり。そのれを害せ。ハ。五頭平とい。盗賊。ハ。五頭平ハ
 とも搦捕して既獄舎に繋れり。原は吉見は等類あり。と。あ。り。ハ。の。と。あ。り。
 首伏の赴い。ま。定。り。な。る。再。て。穿。鑿。せ。れ。あ。の。首。を。と。り。は。い。と。と。駈。こ
 死骸を遮り。あ。り。と。ま。つ。亡。骸。を。親。族。に。任。用。し。て。そ。が。ま。赤。貝。の。郷。よ。う。へ。し。
 い。で。吉。見。あ。り。と。い。ハ。誓。言。を。索。ね。て。替。へ。ん。と。い。ひ。ま。な。れ。バ。僕。ハ。只。の。郷。を。心。あ。く。ま
 する。の。と。ま。し。の。名。を。あ。り。ハ。冠。者。あ。り。告。ま。り。ん。三。三。ね。り。も。相。譚。ん。と。い。ふ。め

うらひうらひつ疑ひ多るふあねなる背の入り庭に立在りしはも知らば
 月方とせくとさうしう人老刀野の奸計主君の厄難救令てその密談ハ編
 奴一外ハ絶てあるもの親の仇ハ主君の讐言をのぞきひの釋あがらむ
 土民の鍾釜めて足利殿の具負め刀野は忍ハ復されど切て故主の先途を
 主恩は報ども人仰つけられしと頻りに請ふて已ざれば美邦も廣光も
 賞賞一年來汝が老実ある志をききあうれば密談をすも聊疑ハ
 然あう親を替せ従才を替せし心の憂ハ切あざし。うらへ還て亡骸を
 葬まやと叮嚀よ諭せども蒙二郎ハ主君の之心りし立退れぬ
 おで送つけまらん。それらぬりのあふ途までも俱一史と頻りて已ざれば
 井平ことと推禁め志のさうとあかぬ。兵多の口舌よ時移らば後悔其
 ならが。時夏その性狐疑多る故あて其よりくまで心をゆるさんや。この
 人よ射れらるその一人ハ年とあり。是則引太郎あざし。既ハ深痰を負ひながら
 砂飛砾を打ちけ脱去んとし。其れと替とあう。是の深痰炎所
 あて脱れがたをきき。あて時夏某を名をうも疑わをなく腹心を
 あてせう。遂は解あよ及べ。所詮其ハ冠者ハ俱して甲夜の間に他郷は
 走らん蒙二郎ハ三三の内室浅良井のを扶引けその子小三三を脊負かて
 赤貝の宿所ハ伴ひあうく藏して相俟べ。江生ハ且く留めて舊縁家財を
 集り赤貝まで退けて内室子息を相伴ひ冠者ハ追著あう。室平ハ夥兵
 ども吉見の二字を脱半ハ対の兵夜の中よりち向人も量ぐにたぐひ
 みるとうへと只管は替せば主従この誤ハ隨ひつ。廣光ハ遠く去庫。其縁の
 金出。あられ美邦これを配分してその二包を腰に纏又三包ハ廣光夫婦

うらひうらひつ疑ひ多るふあねなる背の入り庭に立在りしはも知らば
 月方とせくとさうしう人老刀野の奸計主君の厄難救令てその密談ハ編
 奴一外ハ絶てあるもの親の仇ハ主君の讐言をのぞきひの釋あがらむ
 土民の鍾釜めて足利殿の具負め刀野は忍ハ復されど切て故主の先途を
 主恩は報ども人仰つけられしと頻りに請ふて已ざれば美邦も廣光も
 賞賞一年來汝が老実ある志をききあうれば密談をすも聊疑ハ
 然あう親を替せ従才を替せし心の憂ハ切あざし。うらへ還て亡骸を
 葬まやと叮嚀よ諭せども蒙二郎ハ主君の之心りし立退れぬ
 おで送つけまらん。それらぬりのあふ途までも俱一史と頻りて已ざれば
 井平ことと推禁め志のさうとあかぬ。兵多の口舌よ時移らば後悔其
 ならが。時夏その性狐疑多る故あて其よりくまで心をゆるさんや。この
 人よ射れらるその一人ハ年とあり。是則引太郎あざし。既ハ深痰を負ひながら
 砂飛砾を打ちけ脱去んとし。其れと替とあう。是の深痰炎所
 あて脱れがたをきき。あて時夏某を名をうも疑わをなく腹心を
 あてせう。遂は解あよ及べ。所詮其ハ冠者ハ俱して甲夜の間に他郷は
 走らん蒙二郎ハ三三の内室浅良井のを扶引けその子小三三を脊負かて
 赤貝の宿所ハ伴ひあうく藏して相俟べ。江生ハ且く留めて舊縁家財を
 集り赤貝まで退けて内室子息を相伴ひ冠者ハ追著あう。室平ハ夥兵
 ども吉見の二字を脱半ハ対の兵夜の中よりち向人も量ぐにたぐひ
 みるとうへと只管は替せば主従この誤ハ隨ひつ。廣光ハ遠く去庫。其縁の
 金出。あられ美邦これを配分してその二包を腰に纏又三包ハ廣光夫婦

井平ホが腰纏させその下包へ逃しむ。奴婢よこら取せんるこの餘
 沙金十兩あまりありたるを親従才の香奠よ藁二郎よとせつ先足弱と
 落さんとも。美邦廣光辭齊一件の密淺を淺良井よ説示てとく落
 よといそがせバ淺良井ハ絆の趣もあろめて侍りと忘るありまも
 騒ぐぞ睡臥する小三を横ぎるは抱たきて藁二郎よ肩をばいそげや
 急げと焦燥良人よ辭別る隙をあら裳高く引掲ぐ三人つ立立三具
 夜の闇の枝折の庭櫻肩より散る花の白ひを袖よりあむ折戸を
 開けて走去る當下美邦ハ井平が謀るよ任して猛ハ廣光して額髪を
 剃落させ衣裳を更割菴を腰よして草鞋の紐を結びて又廣光を招き
 近づけ。往方ハ他所を求人より加賀の小松よ赴くべし。美秀今ハ彼奴よ
 ありぬ汝達遙は後もとも佐味竺内ガ宿所よ集合よ只禍を未然ハ

避て主後恙かりんぬい。なまは慶びほしむてとく出よ。しのび
 延うとも汝達夫婦よ失ちあへば存命念くも必ハぬ。そろほやと懇切
 諭せバ廣光目をまぶさた某よりあむるも心ろろあけぬひを翼追著るん
 出させぬと慰めて井井平よ主のう路次のみき。憑むありあろを察して
 井平ハいあや及ぶと諾ひて。美邦よ從ひてとや外面へ立去り庭門より引
 去して廣光より對ひ大約越路へ赴くよ捷路あり岐道多し只今告むハ
 不便ありん上野より信濃の戸隠越後を投て追著るへあちみどといひあむ
 死が似くよ走去まハ二更の鐘ぞ音をなり廣光ハ吻と息をつきて庖福の
 うへよ出てるる奴婢ハ絆の赴を猜しんをのが雜具と運び出つ。つづの程
 逐電して人ひよりもとろとたれバ柱よ倚り嘆息し。いひひるた者共ハ
 とぞ惜むよ足ねども彼ホが口より絆洩れて主君のふと早あられを途き

り心もとほし。さつと大厦の傾くとたよ一木をとりて柱に。只天運に任せんか。と
 ぶとをあらつて心あづらふ。苦く。物々納めて。ふ房の床子。置と飾
 書齋の。菅家の画幅を懸き。青磁の。箱。松と桜の。折條と活
 々。これなど。主君二代の薄命人の。後言と。死なき。冤屈を。歎く。勿し。討の兵士
 ち向く時。移るまで。防戦ひ。死く。までも。後を。ま。主君と。延し。せん。と。あ
 外又他。更も。な。との。律の。為。体。往。時。治。承。四年の。夏。月。十。四。日。の。真。夜。中。に。三。條。高。倉
 宮の。御。所。に。討。の。檢。非。違。使。光。長。兼。成。軍。兵。共。て。五。十。餘。人。を。立。地。に。殺。散
 せ。長。兵。衛。尉。信。連。も。劣。る。も。あ。ら。う。ら。う。か。く。く。の。曉。は。足。利。の。目。代。八。島
 室。平。師。任。八。里。十。人。の。雜。兵。を。て。美。邦。の。宿。所。を。う。巻。き。衛。門。を。頻。に。敲。き。く。
 閑。よ。く。と。し。ま。な。待。備。る。廣。光。ハ。精。悍。を。躬。拵。し。て。刀。を。取。て。腰。に。跨。へ。走。り
 先。く。惟。と。向。室。平。ハ。声。い。ら。ぬ。吉。見。尉。者。美。邦。ハ。訊。向。き。り。あ。り。て。八。島。師。任

み。つ。り。ま。れ。ま。と。く。院。よ。と。焦。燥。ハ。廣。光。や。が。門。放。て。門。扉。も。に。刃。を。刺。し。し
 誘。ふ。ま。と。と。い。ふ。も。ま。ま。む。む。と。う。も。今。書。院。子。舍。便。室。庖。福。也。を。被。処。ら
 と。む。る。と。に。残。る。曲。な。く。索。れ。る。美。邦。絶。て。え。え。が。れ。室。平。あ。ら。う。焦。燥。て。く。れ。ば
 を。や。逃。る。外。面。搜。せ。と。雜。兵。共。侶。舊。の。如。い。で。来。れ。ば。廣。光。怒。り。堪。り。ひ。く。く。と。い。ふ
 狼。藉。の。師。任。ぬ。郷。士。も。源。家。の。一。族。義。邦。ハ。所。要。あ。ら。べ。礼。儀。儼。々。對。面
 せ。で。輝。の。仔。細。も。説。き。尾。陋。の。舉。止。の。意。を。ゆ。べ。一。人。う。ち。苗。守。う。け。あ。り。し
 廣。光。か。く。て。い。へ。を。隨。う。へ。え。や。と。い。せ。も。果。は。室。平。ハ。丁。と。睨。み。立。命。せ。し。ぬ
 下。郎。が。原。来。汝。が。美。邦。を。斬。さ。ば。落。せ。し。あ。ん。者。共。這。奴。が。骨。を。掘。り。首。伏
 さ。せ。よ。と。敷。圍。が。り。け。あ。ら。う。と。左。右。あ。ら。う。立。掛。ら。ん。と。せ。り。破。と。怒。り。光。と。共。に
 眉。間。を。破。れ。れ。叫。び。も。あ。ら。う。及。障。り。を。力。を。又。一。人。二。段。あ。ら。う。付。し。り。あ。ら。う
 騒。ぐ。夥。兵。も。八。方。あ。ら。う。推。取。圍。て。搦。捕。を。競。ひ。懸。き。廣。光。ハ。必。死。の。大。刀。風

義邦の
 國統を
 第5の
 巻に
 えん



廣みつ

勇を
 奮て
 義秀
 ひろ
 廣光
 を
 えん



朝ひみ

幸貞二巻

多勢を敵より難立列立是首よりあられ被起は隠れ秘術を盡す。秘術を盡すは、
 允介は疾を負し三人矢庭に破伏せし。この勢ひ色め立立らるる勢の中を割て
 今門外へ衝と走し出れば彼逃せかど室平八頼は夥兵を駆立て透間も追進す。
 廣光命を惜むあわねどかほ美邦をあひの隨は遠く延さんと欲ひく且戦ひ
 且走して三四町乾る竹藪を盾としてあはれ踏をまり反る大刀を推直して些も
 撓む戦の程は春の夜も短くてもや東雲もなかりたり。廣光あろり悍と
 いどもの身鐵石よわきし。數刻の苦戦は腕疲も天も明は脱れがじと心
 まもく焦燥まよる竹の根は跌死て忽地撞と轉輾はるるや心と西三人
 先とをり累して繩をうけんを聞か抱う。廣光八臥ても足を揚く突倒し
 刻くして八筋斗を撲せ身を起さへく程もあ室平八夥兵あろり進さんとを
 扱をね。數のさよりあせあへのは。然て廣光が頸をくをさる程は誰とあはれ

數の中より猿臂を伸し七室平八項を奪ふと引獲三反あまう投退れは是を
 驚く夥兵も左右獲と逃退たり呆れて數をうち熱視まば竹さやくと強
 己地もあ半身をあろり。是則別人あろり。朝夷三郎美秀も蘭箬の
 苦を脱捨て潤と睨り眼の光も夥兵あろりと魔鬼てそがま地上はなごらう
 伏し室平八進んとさるる項骨と遣らへ腰を抜けて起さへ。但見る盛夏の
 主狗土中を獲死出さし。更し日影もむらあかく又被白昼の群鼠墓あろり
 その巢を毀られ七猫のほろりは出るは似たり。廣光もひろけを。美秀も
 救れく遽しく身を起し。あろり也朝夷ぬ。何の程ありあへ來ませし。寔は
 不慮の再会とあろり。美秀もあ点隊竹踏打り歩を某途までせよ。あはれ數
 の存亡なり。曉きて走來れを見息を喘と世言も勳懸て騒れ色あろり。

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之四終

吉田屋

吉田屋

